



事務局が果たした 東京2020の役割・サポート

1 The role of the secretariat 事務局の役割

東京2020オリンピック(以下、東京2020)でのそれぞれの役割について教えてください

平野 私と岩瀧は五輪開催時は強化普及部強化育成課で勤務し、東京2020では日本陸上選手団全体をマネジメントする「涉外」を務めました。派遣期間中の最も大きな役割としては、大会関係の情報収集、共有と、抗議をするなど競技中に何か問題が起こった場合の対応。競技外では、選手たちは選手村への出入り、味の素ナショナルトレーニングセンター(以下、NTC)やサブトラックの利用、トレーナーのケアなどそれぞれのタイミングで行動するので、その調整が中心です。コーチング、メディカル、広報的な業務以外はすべてやる、という感じですね。

強化普及部強化育成課課長	平野 了 HIRANO Ryo
強化普及部強化育成課	岩瀧一生 IWATAKI Issei
経営企画部広報課課長	高橋祐哉 TAKAHASHI Masaya

※役職は大会当時

涉外の重要性を感じたのが、2016年のリオデジャネイロ・オリンピックの男子50km競歩です。荒井広宙選手(当時・自衛隊体育学校/現・富士通)が3番目にフィニッシュしたのですが、終盤のエヴァン・ダンフィー選手(カナダ)との銅メダル争いの中で接触があったことから、カナダ側から抗議があり、1度は失格の裁定が下りました。しかし、日本もカナダから抗議が出るであろうことを想定して、麻場委員長を始めいろいろな立場の人がその専門性を生かして、エビデンスを持った上で上訴し、結果として銅メダルを取り戻したという経緯があります。そこで東京2020でも、選手団の内外の連携や、全体を俯瞰的に見て足りないところを補う役割として、私たち2名が涉外として選手団入りしたということです。主に岩瀧が国立競技場でトラ

ック&フィールドの対応をし、私が札幌で競歩、マラソン対応をしました。

岩瀧 海外での大会であれば、ホテルに着いたら部屋の数が足りないと言われる、ルームリストを急遽変更したりといった対応もしますし、バスが時間通りに来ない時に運営側とスムーズにいくように交渉することも。喜びも悔しさも、すべて一体となって感じられることはやりがいの一つです。

平野 常に選手団として何が必要かを考えて動く仕事内容なので、大会期間中は睡眠時間も短くなってどんどん疲弊していくのですが、選手の結果が出れば、やっぱりうれしいですね。ただ、メダルを取った場合、次にどんな業務が発生するか、広報にどう対応してもらわなければならないのか、オフィシャルウエアは用意できているかなどいろいろと考えないといけないことがあり、純粋なうれしさや喜びとは違う感じですね。とはいえ、うれしい悲鳴ですが(笑)。

高橋 私は経営企画部広報課の所属で、東京2020でも広報として日本選手団に入りました。大きな役割は選手が競技終了後に必ず通る取材エリア「ミックスゾーン」、メダルを獲得した場合のメダリスト会見をはじめとしたメディア対応、それから陸

上チームJAPANの情報発信やPRです。広報も東京と札幌の両方に対応できるように、私と和賀美咲の2人体制でした。

メディア対応に関しては、ミックスゾーンでメディアの人によりスムーズに取材してもらおうこと、同時に選手がいかにも良い状況で取材を受けられるかをコーディネートすることが主なところ。次のラウンドに進む選手には、取材が長くないように調整するなど、選手の今後につながるよう意識しながら対応していました。その中でも、レース後の選手に最初に会う役割なので、どんな声かけをしようかというのはいつも悩んでいました。この他では、オンライン取材や入村時、メダル獲得時会見などのセッティング。陸連独自のものや、日本オリンピック委員会(JOC)と連携したものも日々調整していきました。

情報発信・PRでは、選手団の中にいるスタッフだから撮れる選手の裏側や、ウォーミングアップや試合に向かう直前の様子やメッセージなどを撮影し、サイトやSNSにアップすること。また、各選手のレポートやリザルトなど、陸上ファン、関係者やスタッフを含めて選手を支える人たちにとって、「こういう情報があったらいいな」というものをイメージして発信していきま

2 The process to TOKYO 2020 and the end of the role 東京2020までの過程と役割を終えて

東京2020までの過程を振り返ってください

平野 2013年に東京2020が決まり、ワーキンググループも立ち上がりました。東京2020で結果を残すことがもちろん前提にはありながらも、本連盟の組織としてそれだけではなく、東京2020の先に何を残すのか、東京2020を契機に何を取り組むのかということも考えていました。これまで、過去を振り返る、過去のデータを整理して何かを作るといったことがなかなかできなかったのも、最初の方向性としては良かったのではないかと思います。その中から『タレントトランスフォーマーマップ』の作成が進み、そこから派生して『競技者育成指針』を策定することができました。これらは、東京2020後に何を残すか、という点でプラスになったものであり、東京2020があったからこそ取り組めたことだと思っています。

具体的な強化に関しては、オリンピック、世界選手権、アジア大会と毎年のように開かれる国際大会に追われていましたし、東京2020が近づいてきたら、国際大会の出場資格に紐づくワールドランキング制度が始まるなど、世界陸連(WA)が決めたことへの対応がすごく求められました。2016年のリオデジャネイロ・オリンピックに向かうまで、一時的に国際大会で厳しい結果になるなど苦しい時間もありました。そのムードを一気に変えてくれたのが、リオでの4×100mリレーの銀メダル。これが起爆剤となって、東京2020へとつながっていったのではないのでしょうか。

ただ、その中で、十種競技・右代啓祐選手の2019年ドーハ世界選手権における代表選考問題(代表内定後にエントリー不可となり、後にインビテーションで出場)など、選考基準に関する課題にも直面しました。選考要項については、この10年で大きく変わったと思います。アスリート委員会が立ち上がったことによって、アスリートの立場から見える課題も意見ももらえ、整理できました。これは東京2020に向かう過程の中で、すごく重要なものでした。アスリート委員会と、問題が起きた時の対応、その課題を今後に残さないための取り組みを一緒に考えることができたことは非常に良かったと思います。

岩瀧 確かに、WAからの方針等に対して、強化委員会では、強化戦略部、アスリート委員会、事務局も交えて諸々対応していく毎日でしたね。それと、「東京2020を契機に」ということでは、いろいろなシステムを良い意味で変えられたことは、非常にプラスなのではないかと思います。東京2020は無観客、ロード種目の札幌移転、女子マラソンのスタート時間変更など選手によっては不利益なことも起こり、あまり良いイメージは残ってないかもしれませんが、ただ、そういったシステム作りの面では、「東京2020」を契機にいろいろと改善することができたと感じています。

高橋 東京2020という、我々の世代には二度とないくらい良いタイミングを使って、陸上競技をどれだけ価値のあるものにできるか、選手の表情を広く届けられるか、といったことにこの数年来いろいろと試して、ここで最大化できるように取り組んできました。ですが、いろいろなことが「普通にはできなかつ

た」という悔しさが残っています。コロナ禍なので選手も、ファンも、支える人も、みんながそれぞれ情報をどのように出していくかをすごく悩みながらやっていました。だからこそ、私たち広報チームとしては選手の表情や、その活躍の裏側をしっかりと発信していこうと決めました。苦しみながらでしたが、選手たちのがんばり、それを支えるスタッフがいたこと、コロナ禍で大会を運営してくれた人たちがいたことを発信していくことができました。合宿などではチームJAPANをどう露出するか。公開練習で広く伝えていただくだけでなく、中に入っている強化のスタッフとも連携して、選手たちの動画や写真を出せたというのは、財産になったと思います。それに対して「勇気ももらった」といった反応が結構あったので、今後のプラスになっていくのかなと思います。東京2020は、今まで思っていたことをこれからバージョンアップさせていく機会になればいい。最大化はできなかったかもしれないですが、今後につながる大会にはなったのではないかと思います。

Q コロナ禍までの過程は計画通りだったのでしょうか？

平野 うまくいったこと、いかなかったこと両方あると思っています。うまくいった点は、マラソンの代表選考に関する部分で、母国で行われる東京2020だから着手できたものだと思います。2016年のオリンピックまで、オリンピックの選考競技会は男女各3レースを中心に、各レースをそれぞれで開催していただいていた。それを、東京2020を迎えるからこそ、マラソングランドチャンピオンシップ（以下、MGC）という制度を、これまでの選考競技会として指定していた各大会にも理解いただけた。強化委員会、選考競技会の関係者、陸連事務局と話し合いを重ね、東京2020に向けた思いが同じ方向であったからこそ変えられたことだと思います。その結果として、東京2020でどんな成果だったかという評価は、外の方に委ねたいと思いますが、選手層が厚くなり、記録水準は向上しています。代表選考の面で手をつけられなかったところに手をつけた

こと事をきっかけに、これだけ変化が生じるのかとも思いました。MGCができたことによって選手の注目度が変わり、それに付随して物事が一気に変わってくるんだなっていうのは感じましたね。もちろん、これはMGCという制度だけで解決したことはありません。日本実業団連合が打ち出した1億円の報奨金の効果も大きかったですね。また、東京マラソン財団さんの支援をいただきキメラプロジェクトという施策も行いました。メディアの方の海外レース（マラソン、男子4×100mリレー）の取材・発信のための派遣への資金援助などで、東京2020や世界選手権に挑む選手たちの姿を、単に競技の結果だけでなく、そこにいたるまでの取り組みを伝えていただいたり、強化的な意図など広く発信していただいたりしました。選手たちの見られ方が変わることによって、意識も変わり、パフォーマンスに好影響を及ぼすこともあるかと思えます。フィジカル的な変化も重要ですが、そこにメンタル的な変化も加わると競技力も上がっていくんだなということを感じました。

高橋 強化が東京2020に向けていろいろな取り組みを進めてくれたので、広報としてはそれを世の中のこととしてどう発信していくか、といった取り組みが2019年まではすごく多かったです。MGCは、初年度はなかなか理解を得るのが大変だったというのが正直なところでした。選手はもちろん、メディアの皆さんにも丁寧に紹介していくうちに、1年経った頃には仕組みを理解してもらい、「わかりやすい方式だ」とまで言われるようになりました。居酒屋のネタになるくらいまでいきましたから、PRとしてはいい流れだったと言えると思います。だからこそ、東京2020ではそれをもっと良くしたかったなという思いがありますが……。

岩瀧 コロナ禍の前で言うと、海外を転戦し、しっかりと経験値を積んでいくという麻場委員長の強化政策の重要な部分は、19年までは順調に行っていたのかなと思います。実際にドーハ世界選手権の成績を見ても、男子競歩2冠、4×100mリレーの銅メダルをはじめ顕著に表れている。その流れで20年を迎えられれば……と感じるところはあります。

しかし、東京2020とコロナ禍は切っても切れない。まったく未知の状況に陥り、何もかもが手探りになりました。その中で、19年までとの違いを挙げれば、「コミュニケーション」になるでしょうか。19年までは、そこまでコミュニケーションに対して意識を置いていたわけではなく、言い方は悪いですがそれでも「なんとなくうまくいっていた」のです。でも、コロナ禍に入ってから、強化の各スタッフ、専任コーチ、事務局の間で、ものすごくコミュニケーションをとることができました。どうすれば選手がパフォーマンスを発揮できる場を提供できるのか、パフォーマンス発揮のための環境を提供できるのか、大会などの運営面も含めて、しっかりと意見交換をして、一緒に考えてきた。新しい強化体制になっても、引き継いでいけるものだと思います。

Q コロナ禍で1年延期が決まった後は？

平野 延期の瞬間はどこで観ていたかな？

岩瀧 どこだったでしょう？

平野 事務局で、テレビを観ていた気がするね。発表を観ていて、そこから先がまだどうなるのか、東京2020がいつに延期になるのかまだわからない状況だったので、「延期か……」という残念な気持ちよりも、どこか冷めた感じという言い方が正しいかわかりませんが、そんな気持ちでした。

高橋 なんとなんそうなるのかな、という雰囲気もありましたからね。正直、延期を受けて会長のコメントを準備しないと、といったこれから何が起こるかかわからない中での事務的対応のことばかりが浮かんできて、オリンピック延期を感情的に悲しむという暇はなかったです。

岩瀧 僕は東京2020までで一区切りだった日本オリンピック委員会（JOC）のナショナルアシスタントコーチの役割がまた延びたことで、家族から文句を言われました（笑）。

平野 正直、2019年のMGC、ドーハ世界選手権を経て、いよいよ東京2020だと気持ちの盛り上がり方がピークを迎えようとし

ている中で、マラソン・競歩の札幌移転が決まり、そのあたりでこれまで考えていた流れとは変わってきて、その流れからの延期だったので、ある意味で「あ、やっぱり」という気持ちになったのじゃないかな。いろんな方々の努力がリセットされることへの虚しさも感じました。

Q コロナ禍の対応で最も大変だったことは？

平野 いつから大会が開催できるのか、東京2020の参加資格がどうなるのか、そのために各大会に何をやっていただければいいのか、それをお願いしたところで受けてもらえるのか……、本当に前が見えない状況でした。それでも、競技会を再開した2020年7月のホクレンディスタンスチャレンジで素晴らしいパフォーマンスを発揮する選手たちを見た時に、「オリンピックに向かう思いを無駄にはいけない」という思いを強く感じました。

マラソンとかに関して言うと、エリートの部だけを実施していただいた大会もありますが、主催者側としてはそれでは収入面でかなり厳しいわけです。それでも、東京2020のために、選手のためにとエリートの部だけを開催するという判断は、本当に難しい判断だったと思います。本当にありがたいと同時に、申し訳ないという思いもありました。各大会から「エリートの部だけでは大会を開催できない」と言われれば、選考ができないわけです。他のスポーツでも選考競技会が開催できない、延期になったなどのニュースを目にし、選手が戸惑っているという記事も読みました。

陸上はきちんと選考競技会を運営していただき、大きな変更なく選考ができました。選考要項を直すという作業だけなら、できる条件の中で強化委員会の考えをベースに私たちが作業をすればいいだけです。でも、選手は選考会自体が白紙になったら、日本代表になるためのロードマップを1度リセットしなければなりません。強化委員会としても、これまで東京2020に向けての強化計画が、1年延期されるということの方向修正は簡単





ではなかったと思います。

岩瀧 東京2020と同様のことは、国内大会でも起こっていました。大会ができる、できないにすごく地域差がある中で、全国大会は実施をしていかなければならない。では、全国への参加資格をどう得るのか。コロナ禍に対する考え方、選手たちが試合に出る機会の差はなかなか埋めることができず、非常に難しかったですね。21年度の日本選手権の参加資格は工夫していますが、どうしてもできない面もあり、選手のみなさんの葛藤を解消できなかったことは申し訳なく思っています。

高橋 広報では大きく2つあります。1つは先ほども述べましたが、情報発信の難しさ。本当にタイミングが難しく、私たちはもちろん、選手たちも悩んでいたと思います。そんな中でも選手たちは、自分たちに何が出来るかをすごく考えてくれて、トレーニング動画をアップしてくれたり、オンラインのイベントを開催してくれたりしました。我々と一緒にやってくれる機会も多くて、ファンの人たちと画面越しではありますが交流を図れたことは、今後の広報活動への良いきっかけになりました

し、陸上の素晴らしさを改めて感じる機会になりました。

もう1つは、大会の報道対応をすべてオンラインにシフトしたこと。体制を整えること、当日の対応など非常に難しかったですし、メディアのみなさんも同様にご苦労をおかけしたと思います。しかし、いろいろなことを変えるきっかけになりました。今までやっていたことが、本来はあまり必要なかったという気づきもあった。技術面も含め、事務局内部だけでもいろいろな人の力を借りましたし、大会運営にかかわる陸協の方々のお借りしないとできませんでした。そういったつながりを作ることができたことが、大きな財産となりました。できれば、今後も必要な部分は利用していきたいですね。

平野 選手たちの発信に関しては、コロナ禍後は、自ら自分の考えを発信するアスリートは増えたと思いますし、広がりも出てきました。これは、すごくいいことだと思います。とはいえ、その一言をきっかけにいろいろな捉えられ方をされる面があるので、選手に負担がかからないようにというのは、こちらでもできる範囲では取り組んだつもりではあります。情報発信に関

しては、すごく難しい状況だったと思いますが、選手は素晴らしい対応だったと感じます。

岩瀧 試合後のインタビューで、大会を開催してくれたことに対する感謝と、運営をしてきている人への感謝の言葉が必ず出てきます。選手たちの素晴らしさを本当に感じた場面ですね。

平野 こんなにつらい思いで臨まないといけないオリンピックは今後はないと願いたいですね。本来であれば、自分自身の気持ちの高まりと、開催都市全体の盛り上がりを感じながら迎えるものですが、その感情を大会前も、大会後も素直に出せないわけですから。

Q 東京2020に向けた活動はどう再始動したのか？

平野 強化としては、まずはワールドランキングによる参加資格をどう得ていくか。WAとしては、参加標準記録とワールドランキングの2通りの出場資格システムは変えないという方針でしたから、海外遠征が今後どうなるかが見えない状況で、いかに国内で行われる高いカテゴリーの大会をきちんと運営していくかが一番重要だと考えました。東京2020を目指す選手たちのために、我々ができることは、そこに向かうための大会の設定・整理をきちんとすることが優先順位が一番。強化委員会の方針を受けて、WAと交渉して、大会のカテゴリーをできる限り上げる、または維持するというのを、国際課を通じて情報収集と交渉をしてきました。世界リレーを開催してWAとのつながりがさらに深まったこともありますが、いろいろなことをしっかりと話ができ、認めていただけたところもあるかなと思っています。

従来の参加標準記録制であれば、出場人数はここまで増えなかったかもしれません。ワールドランキングを最大限活用して、戦略的にポイントをしっかりと取って、出場資格を得ていく選手が多くいました。これは各地域陸協の方々尽力により、グランプリなどの大会が開催できたことが本当に大きかったですね。

岩瀧 毎年4月に強化対象競技者とその専任コーチを集めて研修会を実施しているのですが、ワールドランキング制度が始まってからはそのシステムの説明、その捉え方をしっかりと説明してきましたので、広く周知できたと思っています。加えて、国内でもワールドランキングを高められる方法が確立していったので、選手もよりポイントを獲得できる大会を選んで出場していきました。その結果、2020年度終了時点で、日本人は多くの種目でワールドランキングのかなりいい位置にいました。それだけ大会を開催できたという証でもあるので、非常に感謝しています。

高橋 2021年になっても不安定なところばかりでしたし、「もしかしたら」ということも思わなくなりました。でも、日本グランプリシリーズ、日本選手権など、オリンピックにつながる大会が4月～6月に凝縮されていたので、一大会一大会を濃淡つけることなく、全部扱っていきこう、と。オリンピックを頂点にして戦略的に何かをやっていくというよりは、すべてを大事に、しっかりと発信していくことで、オリンピックにつながっていったらという思いが強かったです。

日本選手権で言うと、テレビ視聴率では表せない数字も合わせてみて、注目度は高かったと思っています。各コンテンツや速報など、サイトへのアクセス数も非常にあり、SNSのフォ

ロワー数も増えていきました。この時期、世の中が活動的だったかと言うと、反応を含めてみんなが迷ってるんだろうな、と感じていたのです。でも、だからこそ発信をやめるのではなく、情報を出していく必要があると強く思っていました。

Q 渉外、広報それぞれの立場から東京2020本番の活動を振り返ってください

平野 国内開催ということで、今までのオリンピックとまったく違って、いろいろな対応ができました。まずはNTCを、バブルの中として運用できたこと。もしこれが、同じコロナの状況で海外派遣だった場合、ADの枚数の関係でなかなか専任コーチに直前まで指導を受けるということではできなかったかもしれません。ただ、今回は、同じバブル内のNTCで選手と接点を持つことができました。一方、計画段階ではもっとやりたいことがあって、本来もっとできたはずなのにできなかったという残念さがあります。私は陸上が始まって、数日したら札幌に行きました。国立競技場の対応は岩瀧、高橋課長のほうがわかっていると思いますが、どうだった？

岩瀧 私自身、オリンピックで選手団に帯同したのは今回が初めてなので、別の大会と比較はしにくいのですが、活用できる範囲内での選手サポートはフルでできたのではないのでしょうか。専任コーチの指導をギリギリまで受けられるのは、選手にとって安心感もあったでしょう。選手村にも好きな日を選んで入村できたので、ケアも含めてギリギリまで普段と変わらない状況を作ることができましたから。ホームアドバンテージはフルに生かしたのではないかと考えています。

高橋 通常の国内大会からすると、いろいろな制限は当然あったかもしれないですが、コロナ禍の国際大会、しかもオリンピックというセキュリティが一番きつい大会ということを見ると、いろんなことができたのではないのでしょうか。平野課長が言うように、確かにもっとやりたいことはありました。でも、やれることの中で精一杯の体制はできたと思っています。

実は、当初は国立競技場の間近にある陸連事務局を拠点にして、いろいろなことを発信しようと考えていましたが……、実際はできませんでした。また、男子リレー合宿あたりから情報を積極的に出していくことと、「選手を守るための広報」の両軸で進めていました。今回は選手団に広報を2人入れてもらったので、東京と札幌に分かれても強化、チームスタッフ、陸連を含めて選手を守るとはチーム一丸となってできたと思います。「攻めの広報」という面では、ファンは選手の今の状況を知りたいののではないかと、事務局の他のスタッフに手伝ってもらい、サブトラックやNTCでの練習風景や、本番に向けて出発する前の様子を動画で撮影して発信しました。出せなかったものも含めて、今後の資産になればいいなと思っています。

平野 札幌では、まず私が選手村に入村し、後から選手やコーチが入村しました。マラソンと競歩だけの選手村というのは、通常のオリンピックでも経験がないですし、札幌に入るまでにいた東京の選手村とも違う雰囲気でした。

東京同様にバブルが運用されていたため、ホテルと練習会場以外はまったく出られませんでした。通常であれば事前に試合会場の下見にいて、選手団の控え場所の確認やサポート部隊の活動場所の確認などしていますが、それもできません。ホテルの食事や、練習会場の状況の報告を後から入るスタッフに送っていたのと、あとはひたすら海外選手から求められるピンバッジ交換に応じていましたね。



選手村では、同じタイミングで入村してきた海外選手団が提供される食事についてのネガティブなSNS発信をしていましたが、それはホスト国として少し残念でした。ただ、選手村となったホテルのスタッフの方がいろいろと意見を聞きながら、少しでも選手にとっていい環境を整えようとしている姿を見た時は、日本の素晴らしさを感じました。日本選手団にもいろいろ

3 Towards the future 未来へ向けて

Q 東京2020のレガシーとは？

平野 先ほども述べましたが、ダイヤモンドアスリート、競技者育成指針、指導者養成指針といった東京2020を機に生まれたものを今後、さらに発展させないといけません。そういう意味で「レガシー」という言葉が正しいかどうかはわかりませんが、次につながるものは作れたのではないのでしょうか。ただ、もっとその時代に合ったやり方を考えないといけないので、そこは強化委員会だけに頼るのではなく、事務局としても選手をどういう形で支援していくのかを考え続けていかないとはいけません。オリンピックが終わったから、こういった新しい取り組みは終わりというわけではなく、東京2020を振り返りつつ、何が良く何が悪かったのか、何を变えるべきかということ、しっかりと精査しないとはいけません。

ここまで、本当に多くの方が「オリンピックだからこういうことやった方がいいんじゃないか」というアイデアをぶつけてくれました。それは本当にありがたかったです。時には重くのしかかる時もありましたが、事務局全体として可能性を求めて考え、動いたことが「財産」として残っていくと思います。
岩瀧 3月に行われた世界競歩チーム選手権、世界室内選手権が、東京2020後で初の世界大会となりましたが、万全の体制で

と配慮いただいたお陰で、大会に向けて良い準備ができたと思います。最終的には各国の選手やスタッフも満足していたと思います。

マラソン、競歩の大会当日は北海道としては異例の暑さでした。女子マラソンのスタート時間の変更には戸惑いましたが、その情報が入った後のチームスタッフの連携は素晴らしかったです。大会としても選手の健康を考えた上での苦渋の決断だったと思いますが、こういう状況はもう経験したくないですね。

いろいろと制限を受ける中ではありましたが、暑熱対策やメディカルサポートも最大限できたのではないかと思います。暑熱対策についてはジャカルタ、ドーハ、東京と暑い環境での国際大会の中で成績を取ってきた実績があります。このノウハウは今後も日本の強みとして継承されていくと思っています。

TICという選手団の渉外の役割を担うスタッフが情報を取りに行ったり、競技運営に関して確認したりする部屋があるのですが、通常の国際大会であれば、かなり感情的にやり取りをしないとイケない場面が多い場所です。海外で開催される大会では、私も感情的に抗議するのですが、今回は日本人の方が相手だったので、ちょっと言いにくさは感じましたね。とはいえ、仕事として言わないといけないこともあったため「そこまで言わなくても……」と思われてないか心配です。

臨めれば日本は上位に食い込めるようなレベルまで来ていると感じました。それも、東京2020の財産の一つ。もちろん、そこに満足するのではなく、さらにレベルアップできる強化の工夫をしていかないとイケないという話を、現強化委員会の方々とはしています。

高橋 若い選手ががんばってくれているので、彼らがさらに活躍できるような体制を我々が整理して届けないと、と思います。こちらが方法を持ち合わせてなくて、外に持っている人がいたとしたら、うまく連携しながらサポートしていくというのが、我々の大事な役割です。

選手団の中に入ったことで、WAの発信方法もじっくりと見ることができましたが、規模を含めていいものを見させていただきました。そこを踏まえて、私としては「日本の発信」を追求すべきかなと感じました。WAはどんどん新しいサービスを始めています。世界競歩チーム選手権では、メディア向けのライブ動画や写真、ミックスゾーンの動画配信がありました。コロナ禍になってから、動画や写真の共有はやってきているので、いい部分は日本ならではの形に変えて提供していきたいですね。理想型を見せてもらっているので、それはありがたいです。

東京2020を経験して、「オリンピックだからこそ」ということに引きずられ過ぎない広報戦略の必要性も感じました。「選手が勝つための広報」として守るという部分と、活躍した選手だけではなく支える人や選手の裏側、スポーツだからこそ見せられる力なども合わせて出していくことの重要性も、東京2020が終わってから広報メンバーとはすごく話をしています。

Q 東京2020後に進んでいる取り組みは？

岩瀧 山崎一彦強化委員長が重要と感じているのが、日本グランプリ（日本GP）シリーズです。これはアスリート委員会を通じた選手の声、事業部、開催地の陸協の方々との連携がカギになりますが、競技会を工夫したり、システムを変えたりして、

選手に利益が生まれるものを作っていかなければならないと、話し合っています。ワールドランキングに記録を反映させるための条件が変わってくるので、そこへの対応も含め、次に向かって動き出す必要がありますから。マラソンはもう1度MGCを実施すること、ジャパンマラソンチャンピオンシップ（JMCC）シリーズの創設など、パリ・オリンピックまでのロードマップが明確になってきました。こういったものを、トラック&フィールドでも構築していかなければいけないので、23年度からしっかりと着手できるようにしていきたいと思っています。
高橋 国内大会については、みんなが陸上競技を見られる環境を作ることがとても大事なことだと思っています。見る方法としては、会場はもちろん、オンラインを通じてなど、さまざまあります。日本選手権やセイコーゴールデングランプリのような核となる大会は、できるだけ多くの人に見てほしい。日本GPシリーズやJMCCシリーズは、いろいろな地域でトップ選手が見られることから、開催地域やその近隣の人たちにはいかに見ってもらうかが、広報としては大事な部分になると考えています。そこに地域の活性化もプラスで加えていければ、さらにいいものになるのかなと考えています。正直、日本の大会スケジュールは、いろいろな大会がある時期に重なっているのが現状です。また、世界の動きとも連動しないとイケない。でも、陸上ファンの人たちがもっと陸上を楽しめるような取り組みをしていくためにも、競技会日程の整備は大事な部分ですし、陸上界全体で取り組むべきことです。

そこには、選手たちの協力も必要になってきます。今、自ら動いて発信をしている選手が多くなっていますし、ファンと直接つながろうというアスリートも増えています。私たちは、それを良い意味でサポートしていくことが一番いいと思っています、そのやり方を模索しているところです。

平野 私は強化育成部の課長から、事業部長を拝命し、新しい業務に従事することになりました。その中で、山崎新強化委員長が就任された時にお話されたことがすごく心に響いています。「選手が究極を目指すことは変わらないけど、陸上競技の新たな価値を見出すために積極的な行動をとっていきたい」。こういったコメントを強化委員長がするというのは、比較的珍しいことだと思います。強化は強化だけということではなく、今は「陸上競技の新しい価値」を陸上界全体で見出そうというポジティブなメッセージだと私は捉えています。東京2020に向けて価値を大切に積み上げてきて、それを残していけないといけないのですが、それだけで競技団体として生き残れるわけではありません。陸連が考えるのは当然ですが、陸上界全体で陸上ファンに何を届けていくのかを考えていかないと、陸上の新しい価値はなかなか生まれてこないでしょう。

それを考え続けて、アクションしていくことがまずは重要です。いろいろな競技団体が予算的には厳しいところがあると思いますが、たとえそのアクションが小さな一歩だったとしても、新しいものに取り組んでいく。そこに、選手の協力も得ながら、どうやったらいい形になるかを考えているところです。「これができれば価値が上がる」というものはないと思います。選手の注目度が上がることも価値でしょうし、陸連の協賛金が増えるということも陸上の価値を認めていただいた事を意味するのかもしれませんが。それぞれの担当、仕事によって「価値」の意味や感じ方が違うとは思いますが、現状維持という意識では今の価値を維持することすら難しい局面に陥るかもしれません。東京2020まで強化に携わらせていただいて、そこに関わって



事業部長として新たな業務に従事する平野了



強化育成課長として引き続き強化担当を務める岩瀧一生



広報課の高橋祐哉課長（右）と和賀美咲も「日本の発信」を追求していく

©Getsuriku

いただいた方々への恩返しでもあるし、陸上界への恩返しでもあるので、陸連、陸上界全体で取り組めるシステムを作っていきたいですね。

岩瀧 世界室内で、久しぶりに満員の観客の中での競技会を味わいました。無観客が続きましたから、観客がいること自体に、やはり感じるものがありますよね。選手たちはやはり、歓声や拍手はすごく力になる。日本でも陸上に興味を持って、会場に足を運んでくれる人がもっと増えるようにしないとイケないと感じました。2019年の日本選手権では、博多の森競技場（福岡）のスタンドは立ち見が出るほど埋まりました。あのような雰囲気の中で競技することは、選手のパフォーマンスアップにもつながるでしょう。

東京2020への流れで、陸上の価値を高めるために、広報と連携をして発信をしていくことの重要性を痛感しました。「今まで通り」は通用しない世界。陸上の価値を高めるために何をすべきなのか、という根本的なところを考えるという楽しい仕事をしていると思っているので、形にできるようにしていきたいです。